荒尾第一幼稚園　最優秀園 実践発表会　開催レポート

2025 年 5 月 24 日（土）、2024 年度ソニー幼児教育支援プログラム最優秀園の荒尾第一幼稚園において、最優秀園 実践発表会を開催しました。午前中の公開保育は本園で開催し約 80 名が参加。午後からは、「地域と共に子どもたちのウェルビーイングを支える環境づくりを目指す」を目的に、近隣のショッピングモールで開催しました。総勢約 150 名が来てくださいました。

発表会概要

1. 日時：2025 年 5 月 24 日（土）　時間（9:00～16:30）
2. 会場：(午前の部)荒尾第一幼稚園　(午後の部)ゆめタウンシティモール
3. 主題：「広がりと深まりを生む環境との対話」園生活に埋め込まれている創作意欲」
4. プログラム
   1. 公開保育
   2. 本日の保育について
   3. 園内環境見学
   4. 「科学する心」を探す事例 ポスター討議
   5. 子どもの声と見方・考え方を伝えるドキュメンテーション(ポスター)　掲示
   6. 保育と小学校の連携パネルディスカッション
   7. 論文実践発表
   8. 秋田喜代美先生と荒尾第一幼稚園職員との対談
   9. 講演「科学する心」でつながるまなざし　秋田喜代美先生/学習院大学教授

公開保育

公開保育では、日常保育をそのままに、子どもたちの自発的な活動の様子を来園者に公開した。年長組は「お化け屋敷プロジェクト」に取り組み、それぞれが役割を持ちながら製作や演出を進め、友達と協力しながら課題を解決する姿が見られた。

年中組では、大型消防車の修理を通じて、ある子の工夫をきっかけに周囲も動き出し、主体的な活動の連鎖が生まれた。

年少組では、布の柱の空間を使った即興的な表現遊びや絵の具製作などが行われ、保育者が子どもの発想を受け止めながら遊びが広がっていく様子が見られた。当日は多くの来園者が見守る中でも、子どもたちは普段通りに『やりたいこと』に夢中になって取り組んでいた。

年長：提灯お化け

年中：消防車の修理

年少：映像で遊ぶ

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。
「ソニー幼児教育支援プログラム　荒尾第一幼稚園　最優秀園 実践発表会（C）公益財団法人 ソニー教育財団 http://www.sony-ef.or.jp/ 」

● 秋田喜代美先生（学習院大学）による講評

秋田先生は、「好きなこと」「こだわり」を大切にする環境に注目し、子どもたちが大人の目を気にせず安心して活動に没頭している姿に感銘を受けたと述べた。雨の日を活かした外遊びの工夫、滑車や構造物を年齢に応じて展開する環境構成についても評価された。

秋田喜代美先生

● 園内環境見学

保育終了後には保育室や園庭の自由見学が行われ、素材配置や空間設計の工夫について参加者から高い関心が寄せられた。「どこに行ってもワクワクする」「素材が子どもを誘っている」との感想が寄せられた。

園内環境見学

午後の部：ポスター討議と市民向け展示

午後はゆめタウンシティモールのセンターコートにて、「科学する心」をテーマとしたポスター討議を実施。地域の認定こども園職員、小学校教員、保護者、一般市民など約 150 名が来場し、15 枚のポスターを囲んで自由に意見を交わした。

各ポスターでは、子どもたちの「やりたい」「なぜ？」にどのように応えるか、保育環境の構成や変化のタイミング、試行錯誤の場づくりなどがテーマとなっていた。ファシリテーターの先生方が参加者と対話を行い、実践的な議論が展開された。

ポスター討議の様子

● 参加者の声より（アンケート抜粋）

・「他園の先生方と直接意見交換できて刺激になった」
・「担当者の説明がとても丁寧で、掲示内容の奥行きが伝わった」
・「小学校の校長先生のポスターでは、地域でつながれない課題に対し、共感の声が多く寄せられていた」

● ドキュメンテーションの展示

「みんなの広場」2 階には、1 週間前から子どものつぶやきや日常の姿を記録したドキュメンテーションポスターが掲示した。地域住民が足を止めて見入り、「こんなふうに子どもを見ているのですね」「子どもってすごい」との声が寄せられ、市民への保育理解の促進につながった。「科学する心」を探す事例ポスター討議と子どもの声と見方・考え方を伝えるドキュメンテーション(ポスター)　掲示は「科学する心」という共通テーマのもと、保育者・保護者・市民が多様な視点から保育について語り合う貴重な時間となった。

1 週間前から「みんなの広場」に掲示

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。
「ソニー幼児教育支援プログラム　荒尾第一幼稚園　最優秀園 実践発表会（C）公益財団法人 ソニー教育財団 http://www.sony-ef.or.jp/ 」

開会

荒尾市の浅田市長、ソニー教育財団の根本会長よりご挨拶をいただいた。荒尾市ご出身のソニーグループ株式会社吉田会長よりビデオメッセージをいただいた。

荒尾市　浅田市長

ソニー教育財団 根本会長

ソニーグループ 吉田会長

保育と小学校教育の接続：パネルディスカッション

午後の後半は、「保育と小学校教育の連携」をテーマにパネルディスカッションが行われた。登壇者は、秋田喜代美先生（学習院大学）、塩村校長（荒尾市立清里小学校）、宇梶園長、年長担任・増永教諭、本園職員で小学生の保護者である池田氏の 5 名。それぞれの立場から、多様な視点で幼保小接続のあり方が語られた。

保育と小学校の連携パネルディスカッション

● 秋田喜代美先生の視点

全国の現状と比較して、荒尾第一幼稚園と清里小学校の連携は稀有な実践であるとし、「お便りを通じた対話」「相互理解の文化」が根付いていることを評価した。

● 小学校側（塩村校長）の視点

園のドキュメンテーションから学ぶ姿勢を持ち、小学校が“教える場”にとどまらず“学び合う場”であることの大切さを語った。幼児期の姿から学ぶことの意義を強調し、「できる・できない」を行き来できる教育環境の必要性を述べた。

保育と小学校連携パネルディスカッション

● 幼稚園側（宇梶園長・増永教諭）の視点

園からも小学校の教育内容への理解が必要であり、小学生が行う学力テストを保育者が説いてみるという体験を通して、園の教育が小学校と接続していることを実感した。増永教諭は、文章問題の読解力と、園での「話を聞く・考える」活動のつながりを実感したと述べた。

● 保護者（池田職員）の視点

保護者の立場から、小学校に進学した際の“失敗が評価されることの少なさ”に戸惑いを感じたと語り、「幼児期の挑戦する気持ちが持続するような接続が必要」と述べた。

● 秋田先生の提言

「小学校の教科書を園の先生が知らない現状」に言及し、関心を持つことから始める連携の重要性を訴えた。また、図書館探検や教科書を使った環境構成、廃材ランドセルの園での再利用など、具体的事例から、幼保小の接続における創意工夫の可能性を提示した。

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。
「ソニー幼児教育支援プログラム　荒尾第一幼稚園　最優秀園 実践発表会（C）公益財団法人 ソニー教育財団 http://www.sony-ef.or.jp/ 」

● 教育長の紹介エピソード

荒尾第一幼稚園出身の高校生たちが、小学生に、夏休みや冬休みに勉強を教えようと活動をはじめた。まわりが投げかけたものではなく自主的なもの。一人一人が通う高校は違うが、元は荒尾第一幼稚園の同級生というつながり。この活動は、後輩たちが今もなお行っている。まさに、園の教育が、小学校中学校高校まで続いている素晴らしい例ではないか。

論文発表・対談・秋田喜代美先生 講演

● 実践論文の発表

論文の実践発表

年中担任・藤原教諭からは「ロボットの出てくる映画づくり」の実践報告があった。子どもたちの「見てほしい」という気持ちから創作が始まり、段ボールやキャスターを使ったロボット制作、失敗を繰り返しながらの工夫、そして“リサイクル”の概念を取り入れた解体へと展開した。記憶や経験が次年度の活動にも引き継がれた。

年長担任・増永教諭からは「お化け屋敷プロジェクト」の報告があった。前年の経験から創作意欲が芽生え、仲間と協力して空間演出に挑戦。振り返りの時間を重ねながら改良を重ね、「驚かせたい」という思いが探究につながっていった。活動後は光を使った遊びから宇宙への関心が生まれ、色や形の工夫へと広がっていった。

● 秋田先生との対談

（右） 中ノ子先生

対談では、中ノ子寿子先生（尚絅大学短期大学部）にコーディネーターをしていただき、対談が行われた。園長・担任 3 名が登壇し、「科学する心」や保育のふり返りについて語った。秋田先生は、荒尾第一幼稚園の実践が“丁寧に見つめ直す文化”として根づいていると評価。

園長は「過去の正解では解決できない未来を生きる子どもたちにとって、自ら課題を発見し、解決していく力が必要。その力は創作活動の中で育つ」と述べた。担任らは「提案しない、確認する」保育、「まずやってみる」姿勢の大切さを実感したという。

● 秋田先生講演「科学する心でつながるまなざし」

秋田喜代美先生

講演では、「科学する心」が単なる理科の知識でなく、探究・創造・未来志向の実践であることが語られた。荒尾第一幼稚園の保育は、「一人の好きなこと・こだわり」が仲間や社会へつながるプロセスを丁寧に支えており、意欲・見通し・振り返りを重視する姿勢が探究の基盤になっていると語られた。また、素材との対話やリサイクルの考え方が、物へのまなざしを育てると評価。「子どもが段ボールを“ただのゴミ”ではなく、“また何かに使えるかもしれないもの”として捉える園文化」に注目した。６５年前に論文事業を始めたソニー創業者井深大氏の理念と結びつけて称賛された。最後に秋田先生は「参加者一人ひとりの“わくわく”が、全国へ広がっていくことを期待します」と締めくくった。

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。
「ソニー幼児教育支援プログラム　荒尾第一幼稚園　最優秀園 実践発表会（C）公益財団法人 ソニー教育財団 http://www.sony-ef.or.jp/ 」